12)　フランス語のなかのテロ

工藤　進

テロを表すフランス語

フランス語には ラテン語起源の attentat（本義は tentative〈企て〉）という語がある。これがいわゆる日本で現在言われている「テロ」と同義である。フランスでテロを指すメデイア用語は terrorisme ではなくこの 14 世紀頃から用いられている attentat のほうである。terrorisme にしろ attentat にしろ、政治的主張を感じさせるものでありながら、これが日本語ではひとしなみに「テロ」と呼ばれ、それには「けっして屈してはならない」ものとして国民に提示されている。しかもこのテロ行為から政治的意図を抜き去り、「（テロは）それが目的でしかない非常に無責任な暴力（...），もともとテロリズムは、守るべき信義をもっていない、非常に無責任なもの」と説明した知事がいるが、テロはそれ自体が目的なのではなく、かならず政治的な意図があるという意味で、これはテロリズムの本義ではない。

政治的手段としてのテロリスムという語が使われはじめたのは、ロベールの辞書によれば、フランス革命の大恐怖時代（La Terreur、1793 年から 94 年にかけて）以降である。テロリスト（terroriste）、動詞 terroriser（恐怖で震え上がらせる、初出 1796）も同様だ。この辞書は、もう一つの動詞 terrifier (震え上がらせる)も 1794 年を初出としているが、ラテン語 terror (恐怖)や terreo（震える）から派生している terrible (恐ろしい)が 12 世紀、また明らかに terrifier を前提としている形容詞の terrifiant（恐ろしい）は 16 世紀には用いられている。

テロの語源であるラテン語 terror, terreo の語根は、ラテン語語源辞典によれば、印欧語根*ter- (震える)。英仏の tremble(r) (震える)、英語の tremendous (恐ろしい), tremor（恐怖、震え）などは、この*ter-を語根とするラテン語 tremo (震える)に発する。辞書の初出は文献上のものなので、実際用いられた時期はそれより相当さかのぼるのがふつうだが、terrifier は terroriser より明らかに古く、一方 terroriser は おそらく terrorisme, terroriste という言葉と同時に使われはじめたのだと推定できる。つまり、「テロ」という言葉は 18 世紀末以降ということになり、「テロ行為」とはもともとフランス革命中の殺人暴力を背景とした政治行為そのものであった。

「抑止力」force de dissuasion ということがよく言われた。この「力」は倫理的な力ではなく、軍事力であることは言うまでもない。さらにこの力は対象側ではなく、主体側の必要から「行使」することが前提となっている。つまり「抑止力」とは、人を「(暴力で)震え上がらせて言う事をきかせる力」force de terrorisme にほかならない。このテロはよかれあしかれ現在世界でふつうに行われている政治の方法である。世界はまさにこうしたテロに屈してはならないのに、多くの国や人が服している状態が現状

ではないか。

もう一つのテロ

興味深いのは、テロ行為をあらわすもう一つのフランス語の由来である。フランス語には 16 世紀のイタリア語から入ってきたとされる assassin (暗殺者)という語があるが、この暗殺行為を assassinat (英 assassination)「暗殺」と称する。ラルースのある辞典によれば、assassin という語は十字軍に苦しむ中世のイスラム世界にさかのぼり、buveur de haschisch (大麻吸飲者) というのが原義とされているが、13 世紀にはすでに assasis という形で本義（暗殺者）に、また比喩的に用いられていた。旧ロベール大辞典には、「= Haschischin 暗殺者、殺し屋（16 世紀のユマニスト、アンリ・エチエンヌの記述)。ハシシュ（大麻）吸飲者。シリアのイスマイル派（シーア派）に与えられた名。彼らは十字軍の期間、多くのキリスト教徒およびイスラム教徒を殺害した」という語義の後、ヴォルテールによる次のような説明がある。「十字軍の騎士はアラブの山人の長を〈山のおやじ〉と呼び、これを大君とみなしていた。この長は、モンフェラ侯（チュロス港の主権者）のような人物やほかの十字軍の諸侯を公道で強殺したからである。彼らはアッササンと呼ばれた。この〈山のおやじ〉の話は 600 年ものあいだ、くり返し語り継がれた。彼はエリート青年を自分の甘美な庭園に呼んで悦楽を味あわせたあと、永遠の極楽に値させるため世界の果てまで送りだし、王侯を暗殺させた」。

これによるとアッササンはまさに現代の自爆テロリストである。〈山のおやじ〉の話が 600 年も語り継がれたとすれば、ちょうどヴォルテールのころまでだ。この〈おやじ〉は同一人物ではなく、抵抗の象徴として語りつがれたのに違いないが、今日も誰もがただちに思い浮かべる〈山のおやじ〉がいる。

テロリズムは少なくとも十字軍が始まった 11 世紀においてすでに現代的な姿で、しかも極めて政治的な側面をもって存在していた。国家として 200 年を少々超える歴史しかないアメリカと違い、フランスはこうしたイスラム世界と大昔から交渉があった。イスラム圏とキリスト教圏の最初の大規模衝突であるポワチエの戦い（732 年）から数えると、その交渉は優に 1200 年をこえる。

テロとアッササン教団

1993 年、『タニオスの岸壁』でゴンクール賞を受けた Amin Maalouf は、その十年前の 83 年に『アラブ側からみた十字軍』を出版している。このタイトルは本の内容を言い表わしているが、副題に「聖地におけるフランク人の蛮行」とあるように、今から 900 年前の十字軍時代からはじまるイスラム世界でのヨーロッパ人（特にフランス人）の残虐行為を、当時のアラブ側の歴史家、年代記作家の記述、日記などに証言を求めて描いたものである。著者の Amin Maalouf はレバノン生まれのパリ在住者で中近東の

すぐれた専門家として知られている。名前、風貌からしてアラブ風だが、こういう人をすぐ自国文化にとりこむ現代のフランスはしたたかである。

さてヨーロッパから来た人間は当時のイスラム世界では「フランス人」Faranj, Faranjat, Ifranj, Ifranjat などと呼ばれていた。この『アラブ側からみた十字軍』では、今でもヨーロッパ人を指すのに用いられているという Franj を用いている。フランス人がヨーロッパ人を代表しているということは、当時の兵員のなかで、フランスからの人々が圧倒的に他の言語の兵員を上まわっていたからだろう。アラブの歴史家たちは、「フランス人」の野蛮（とくに医学知識の低劣さ、稚拙、残酷な処罰制度、不寛容など）を描いているが、これはまさに現在のアフガニスタンやイラク人を見る、「先進国」の人たちの憐憫にみちた目を思わせる。当時のイスラム社会はヨーロッパ社会よりほとんどあらゆる点で進んでいたことを私たちは知っているが、こうした反対側からの視点にあうと、まるで聞き知っただけの過去の国に、時間をさかのぼって行く感がある。

Amin はさらにアッササン（テロリスト集団）について書いている。イスラム側からみたアッササンとは一体どのようなものか。第一回十字軍（1096-1099）がはじまる前の 1090 年、イスラム世界の「歴史のなかでもっとも恐るべきアッササン教団（シーア派）」をつくり上げた男は、現在のテヘラン近郊に生まれたハッサン・アル=サーバという人物である。教団の創立年代は第一回十字軍襲来のかなり前だから、この教団は十字軍襲撃の目的で創立されたのではない。当時はスンニー派が権力を握った時期であり、アッササン教団はこのスンニー派に対抗して生まれたのである。

「教団員は、教養、信頼性、勇気の程度により、見習いから団長まで分けられ、教義ならびに肉体の訓練を集中的に受けた。敵を〈震え上がらせるため〉ハッサンの選んだ方法は暗殺である。教団員はそれぞれ、名指された人物を殺す役目をもち一人で派遣されたが、二三人の小グループになることもあった。彼らはふつう商人あるいは苦行僧に変装してテロの現場となるべき町を巡り、狙った人物の場所と日常とを熟知する。（...）暗殺の準備は隠密裏に進められるが、決行はできるだけ多くの公衆の前で行われた。場所はモスク、時は金曜日、正午が選ばれたのはそのためである。

暗殺は単に敵を消す方法ではなく、狙った（高位の）人物に罰を下したこと、また〈フェダイン〉と呼ばれる特攻者の犠牲は崇高であったという、二つの教訓を人に示すことであった」。Amin はハシシュ吸飲説には懐疑的で、そういうものも行為の補助として用いたかも知れないが、原動力ではないという立場である。対立派からもシーア派からも嫌われたこの原理集団は、むしろキリスト教徒と友好関係があったほどだが、しだいに内外の政治経済勢力の武器となっていく。サラディン王（スンニー派）は自分を襲ったこともあるこの教団を懐柔し、自分の味方につけようとしているし、獅子王リチャードはこの教団を使って同じ十字軍側の大侯（モンフェラ侯）を暗殺さ

せた。

Amin は、同盟を結びに教団の砦に出かけたエルサレムの主権者、アンリ・ド・シャンパーニュ侯の会見のもようを次のように述べている。「教団長はフランク人の客に自分の権威を証明するため、二人の団員に城壁の高みから飛び下りることを命じた。するとその二人は一瞬のためらいもなく命令に従った。団長はなおも続けようとするのでアンリは懇願してやめさせねばならなかった」。同盟締結後、さっそく教団側は相手に暗殺の注文を聞く。十字軍はキリスト教圏内の略奪集団（1204 年、コンスタンチノープル略奪）に変質する一方、教団は暗殺を商品化していく。この過激な行動の背景には西欧の圧力で変化するイスラム社会があるはずだが、教義と活動に関するペルシャ語による教団記録が 13 世紀中葉モンゴル軍によって破壊され、 アッササン教団の本質は明らかではない。

テロリズムは政治目的をもった暴力である。制度化されたこの方法はイスラム世界で栄えた後、眠りに入ったが、現在決定的によみがえったのではないか。この「卑怯な」方法は十字軍その他を通じてヨーロッパに伝わり、今や国の大小を問わず「抑止力」として普遍的なものになっている。集団の自衛手段としての個人死の歴史は太古にまでさかのぼる。めざましい武器をもたない者の攻撃手段でもある自死のテロを誰が止められるのか。　フランスは 20 世紀に第一次、二次、アルジェリア戦争と自国領土を戦場とする三度の大戦争を経験している。第一次大戦では男子活動人口の一割を失い、18 歳から 27 歳までの男子は四人に三人が死傷者となった。二次では戦死者は一次に比べて少ないものの、ドイツ軍による占領を経験し、性格のあいまいなヴィシー政府軍を背景に、内戦に限りなく近いレジスタンスを戦った。ベトナムの泥沼から抜け出てほっとするまもなくアルジェリア戦争があった。20 世紀で初めてイスラムのテロリズムと事を構え敗退した国はフランスである。その教訓は生かされねばならない。テロには必ず相当の政治背景があることを現在身をもってよく知る国はフランスである。「フランスは甘えている」と言った大臣がいたが、甘えているのははたしてどちらか。テロを絶対悪とした単眼的対処では決してうまくいかないだろう。（くどう・すすむ）